

2025 年度 FD・SD 推進委員会活動報告書

2026 年 7 月 23 日

白百合女子大学 FD・SD 推進委員会

1. 活動経過

2025 年 5 月	全学 FD・SD 研修会「2025 年度即時オープンアクセスの義務化に向けて」実施 *1
2025 年 5 月	2024 年度後期授業改善のための学生アンケート 顕彰授業表彰及び顕彰授業における工夫 Web 公表 *1
2025 年 7 月	2025 年度前期授業改善のための学生アンケート実施（前期科目対象）*1
2025 年 7 月	2024 年度「FD・SD 推進委員会活動報告書」を本学ホームページにて公開
2025 年 7 月	FD・SD 研修会「PROG をいかに学生指導に活用するか」実施（内部質保証委員会との共催）*1
2025 年 7 月	オンデマンド FD・SD 研修「即時オープンアクセス続編・オープンアクセスに関わって研究者が知っておきたいこと」への協力（～2026 年 3 月）*1*2
2025 年 10 月	大学院 FD 研修会「大学院をめぐる状況について」（大学院専門委員会との共催）実施 *2
2025 年 10 月	2025 年度前期授業改善のための学生アンケート顕彰授業結果報告及び顕彰授業における工夫 Web 公表 *2
2025 年 11 月	全学 SD 研修会「白百合女子大学のこれから ― 長期ビジョンと第 2 期アクションプラン（中期計画）を有効に機能させるために ―」実施 *2
2025 年 12 月	よりよい学びのための学生懇話会実施（学部生対象）
2025 年 12 月	全学 FD・SD 研修会「文系大学教育における ICT 利用の実際」実施*2
2026 年 1 月	2025 年度後期授業改善のための学生アンケート実施（後期・通年科目対象）*2
2026 年 1 月	オンデマンド FD・SD 研修「2025 年度即時オープンアクセスの義務化に向けて（研究データ・研究データ管理編）」への協力（～2026 年 3 月）*2
2026 年 2 月	FD・SD 推進委員会委員企画 FD・SD 研修会 「『語学・文化教育』を事例として生成 AI 活用を考える」実施*2
随時	各教育組織等で実施した FD・SD 研修等を記録し共有*1*2

*1 令和 7 年度 教育の質に係る客観的指標調査票 に対応

*2 令和 8 年度 教育の質に係る客観的指標調査票 に対応

2. 各ワーキンググループの活動

本委員会は、「研修会」、「授業改善のための学生アンケート」、「学生懇話会」の 3 つのワーキンググループを中心に、各委員が企画・運営を担当している。以下にその活動状況を報告する。

I. 全学 SD 研修会

自己点検・評価活動の一環として、「大学ビジョン(長期計画)」との関係から 2026 年度よりスタートする「第 2 期アクションプラン (中期計画)」の目指すところを理解し、実施体制、進捗管理方法などを教職員間で共有し、開始時点からプランを有効に機能させる基盤を作るため、SD 研修会を企画し実施した。

→ 資料 1 (pp.5-7) 参照

実施日時：2025 年 11 月 17 日 (月) 16 時 30 分～18 時 00 分

実施形態：対面、Zoom でのリアルタイム配信、録画視聴

参加人数：専任教員 75 名、専任職員 58 名、非常勤職員 6 名 合計 139 名

II. 授業改善のための学生アンケート

実施期間：〔前期〕2025 年 7 月 2 日 (水) ～7 月 25 日 (金)

〔後期〕2025 年 12 月 22 日 (月) ～1 月 26 日 (月)

実施方法：Web (CAMPUSSQUARE)

対象科目：文学部専門科目、外国語科目、中等教職課程科目、

大学院 (国・フ・英・言) 専門科目

2022 年度からは、学生の負担軽減と回答率向上、そして適切なアンケート運用を目的に、実施対象科目を二分割し、2 年間で全科目を網羅する方式とした。設問項目は 2023 年度に 28 問から 23 問へと大幅に削減し、2024 年度には設問数を維持したまま一部を修正した。2025 年度は経年比較のため、前年と同一の設問で実施した。回答率は前期 36.5%、後期 32.4%で、概ね例年並みであった。

集計結果は授業およびカリキュラム改善に活用するため、担当教員のほか、学長・副学長・研究科長・学科長・センター長へフィードバックした。アンケート結果を踏まえた顕彰授業は資料 2 (pp.8-9) のとおりであり、全体の傾向や顕彰授業の工夫については報告書にまとめ、以下のホームページで公表した。

<https://www.shirayuri.ac.jp/guide/financial/fd-sd/#a02>

前述の通り、2022～2025 年度は学部・大学院の全科目を二分割してアンケートを実施した。この期間に計 8 回のアンケートを行い、平均回答率は 35.2%であった。2020 年度後期にアンケートを紙媒体から Web 方式へ切り替えた際の回答率が 18.5%であったことを踏まえると一定の改善は見られるものの、十分に回復したとは言い難い状況が続いている。

また、教員からは全科目での実施を望む声が寄せられていたほか、科目を二分割して実施することに伴う周知の難しさなどの課題も明らかになった。これらを踏まえ、さらなる検討を行った結果、2026 年度からは全科目を対象としてアンケートを実施する方針とした。

設問項目については、内容が類似するものを統合するなど大幅な見直しを行い、従来の 23 問から 13 問へと削減した。自由記述欄では、授業改善という本来の目的に加え、学生がアンケートを通じて授業への向き合い方を振り返る契機となるよう、問いの立て方にも配慮した。

Ⅲ. よりよい学びのための学生懇話会

実施日時：2025 年 12 月 2 日（火）12 時 10 分～12 時 55 分

参加者数：学部生 11 名、教員 2 名、職員 3 名

学部生を対象に、「大学のキャリア支援」と「宗教学科目」をテーマとして懇話会を実施した。当日は 3 グループに分かれ、各学生が自身の経験等をもとに、良い点や改善点を出し合い活発な意見交換の場となった。学生の意見はキャリア支援課とカトリック教育センターへ共有した。報告書は以下のホームページで公表した。

<https://www.shirayuri.ac.jp/guide/financial/fd-sd/#a03>

3. 各教育組織及び FD・SD 推進委員会委員有志による FD・SD 研修会の実施

各教育センター・学科で行っている FD・SD 研修と、本委員会委員有志が企画・運営した FD・SD 研修会は、成果を記録し随時共有している。

→ 資料 3（pp.10-22）参照

4. 他部署・組織との連携による FD・SD 研修会

2025 年度は以下のとおり 6 件実施した。

① 全学 FD・SD 研修会「2025 年度即時オープンアクセスの義務化に向けて」

実施日：2025 年 5 月 12 日（月）16 時 30 分～18 時

共 催：教学担当副学長、事務局長

→ 資料 4（pp.23-26）参照

② FD・SD 研修会「PROG をいかに学生指導に活用するか」

実施日：2025 年 7 月 14 日（月）16 時 30 分～18 時

企 画：学生関係担当副学長、教学担当副学長 共 催：内部質保証委員会

→ 資料 5（pp.27-31）参照

③ オンデマンド FD・SD 研修

「即時オープンアクセス続編・オープンアクセスに関わって研究者が知っておきたいこと」

実施日：2025 年 7 月 31 日（木）～2026 年 3 月 31 日（火）

主 催：教学担当副学長、事務局長 協力：図書館、FD・SD 推進委員会

→ 資料 4（p.22）参照

④ 大学院 FD 研修会「大学院をめぐる状況について」

実施日：2025 年 10 月 2 日（木）16 時 10 分～16 時 40 分

共 催：大学院専門委員会

→ 資料 6（pp.32-34）参照

⑤ 全学 FD・SD 研修会「文系大学教育における ICT 利用の実際」

実施日：2025 年 12 月 22 日（月）16 時 30 分～18 時

企 画：教学担当副学長 主 催：FD・SD 推進委員会

→ 資料 7（pp.35～39）参照

⑥ オンデマンド FD・SD 研修

「2025 年度即時オープンアクセスの義務化に向けて（研究データ・研究データ管理編）」

実施日：2026 年 1 月 26 日（月）～3 月 31 日（火）

主 催：オープンアクセス推進ワーキンググループ 協 力：FD・SD 推進委員会

→ 資料 4（p.22）参照

5. 職員における SD 研修の実施状況

2023 年度から、外部研修として日本能率協会主催の JMA 大学 SD フォーラムに参加しており、2025 年度は延べ 10 名の職員が研修に参加。具体的には、「教育関係法令の理解と設置認可申請作成や学内規程作成のポイント」「私立大学のための実践的労務管理のポイント」「管理職向け共創型リーダーシップと内省力」「エクセルを活用した大学データ分析入門」等、専門分野ごとに多様な研修へ職員の参加を促している。

以上

FD・SD 推進委員会

2025 年度 全学 SD 研修会 実施報告書
「白百合女子大学のこれから ― 長期ビジョンと第 2 期アクションプラン
（中期計画）を有効に機能させるために ―」

教職員のSD推進活動および自己点検・評価活動の一環として、「大学ビジョン(長期計画)」との関係から2026年度よりスタートする「第2期アクションプラン（中期計画）」の目指すところを理解し、実施体制、進捗管理方法などを教職員間で共有し、開始時点からプランを有効に機能させる基盤を作るため、下記のとおりSD研修会を企画した。詳細は以下の通りである。

日時・会場：2025年11月17日（月）16時30分～18時 クララホール

方 法： 対面、Zoomでのリアルタイム配信、録画視聴

テ ー マ：白百合女子大学のこれから ― 長期ビジョンと第 2 期アクションプラン
 （中期計画）を有効に機能させるために ―

講 演 者：学長室会議中期計画策定部会長・カトリック教育センター教授

石井雅之先生

「第2期アクションプラン（中期計画）策定・推進の協力体制について」

第7代白百合女子大学学長 猪狩友一先生

「白百合女子大学の今後について―第 2 期アクションプラン（中期計画）
 等を踏まえて―」

対 象： 全専任教員・全職員（非常勤職員の参加は任意）

1. 講演内容

石井雅之先生より第2期アクションプランの策定のポイントについて報告があり、続いて近江事務局長より中期財政計画策定の背景や2026年度から4年間の中期財政計画について説明が行われた。その後、猪狩友一先生より「大学ビジョン（長期計画）」に基づき策定された「第2期アクションプラン（中期計画）」の重点項目と推進の留意点について説明があり、最後に質疑・応答が行われた。

2. 参加人数

専任教員：75名／研修対象73名（参加率100%）

専任職員：58名／研修対象58名（参加率100%）

非常勤職員：6名

合計：139名

※ 実施時にサバティカル、休職等で不在の専任教職員は研修対象から除外

3. 参加者アンケート集計結果

以下のアンケート回答は学内教員である当日の講師2名を含まない、参加者137名の回答を記載するものとする。

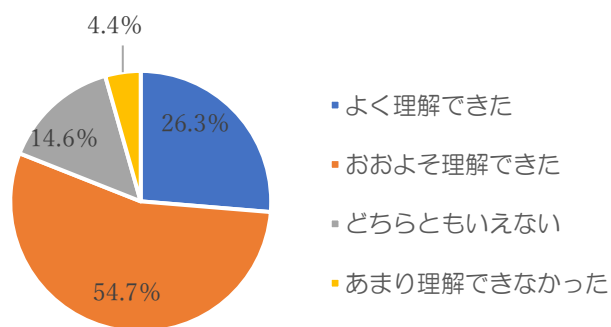
①参加形態

参加形態	度数（人）	パーセント
対面	20	14.6
オンライン	67	48.9
録画	50	36.5
合計	137	100.0

②研修目的①の達成状況について

大学ビジョン（長期計画）およびそれを踏まえた「第2期アクションプラン（中期計画）の内容について理解を深めることができたか。

達成状況①	度数（人）	パーセント
よく理解できた	36	26.3
おおよそ理解できた	75	54.7
どちらともいえない	20	14.6
あまり理解できなかった	6	4.4
全く理解できなかった	0	0
合計	137	100.0



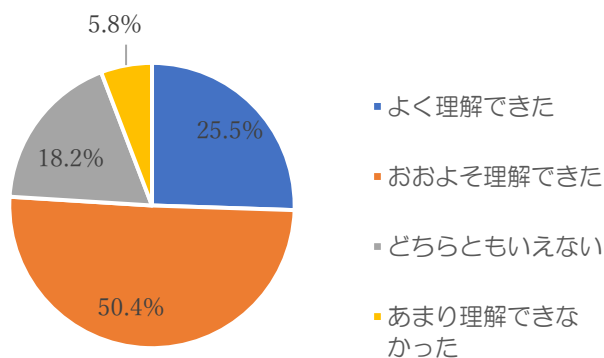
目的①の達成状況

③研修目的②の達成状況について

「第2期アクションプラン」の進め方について理解を深めることができたか。

目的②達成度別集計

達成状況②	度数（人）	パーセント
よく理解できた	35	25.5
おおよそ理解できた	69	50.4
どちらともいえない	25	18.2
あまり理解できなかった	8	5.8
全く理解できなかった	0	0
合計	137	100.0



目的②の達成状況

④大学ビジョンおよび第2期アクションプランについての意見（自由記述）

計画の進め方は理解したが具体的な話がほしかった、危機感は共有できた、という意見が多くみられた。より具体化された情報や方針があれば、行動目標が明らかになる、教職協働を進めていくことができるのではないかといった内容の意見もあげられていた。また、教職員一人ひとりの意識改革が必要、「自分ごととして捉える」という言葉が響いた、といった意見もみられた。

⑤本研修会についての意見（自由記述）

財務関連の説明も含め、今後の継続的な研修会を求める意見があげられていた。

⑥研修会で学びたいテーマや要望について（自由記述）

外部資金獲得のための研修会、支援の必要な学生への理解、ハラスメント関連、教育・業務 DX 化、生成 AI の活用、学生募集等、多岐にわたる要望があげられていた。

以上

「授業改善のための学生アンケート」2025 年度前期 顕彰授業について

2025 年 9 月 18 日

白百合女子大学 FD・SD 推進委員会

「授業改善のための学生アンケート」は 2010 年度より実施し、2017 年度からは集計結果を活用した顕彰制度を導入しています。アンケートの結果は個々の授業やカリキュラム改善に役立てられているほか、高評価を得た授業を公表し、その授業の優れている点を大学全体で共有しています。なお 2022 年度より 2 年間で全科目のアンケートを実施することとし、2024・2025 年度は全科目区分を 2 分割して実施しています。2025 年度は、文学部専門科目、外国語科目、中等教職課程科目、大学院（国・フ・英・言）専門科目が対象です。

2025 年度前期の結果は以下のとおりです。顕彰された授業における工夫等を追って公開する予定です。授業のあり方は授業の数だけありますが、顕彰された授業における工夫を知ることにより、よりよい学びのためのヒントが得られる機会になればと願っています。

2025 年度前期

少人数部門（履修者 6～19 名）

フランス語フランス文学科専門科目 水曜 2 限 前期

「専門ゼミⅠ」 畠山 香奈 先生（文学部フランス語フランス文学科准教授）

多人数部門（履修者 20 名以上）

国語国文学科専門科目 火曜 2 限 前期

「書道」中野 和博 先生（文学部国語国文学科非常勤講師）

白百合女子大学「授業改善のための学生アンケート」の目的（実施要領より抜粋）

- ① さまざまな角度から学生の反応・実態を知ること、個々の授業の授業内容・教授方法等を、教員自身が見直し改善するための材料を提供する。
- ② 設備や機材、資料など、学習に適した環境を大学がどの程度提供できているかを測定し、これを改善していくための材料を得る。
- ③ 学生が学びたい内容を適切なレベルできちんと教授できているかを知り、大学全体、あるいは学科や学年ごとのカリキュラム内容を、必要に応じて改善していくための材料を得る。
- ④ 科目に対する学生の意欲や、授業時間外での学習の実態を把握することで、カリキュラムが想定している努力を学生が傾けているかを測定し、必要に応じて改善の方法を探るための材料を得る。
- ⑤ 学生に対して、自らの学習のあり方を見直し、大学での学習をより実りあるものとするための材料を提供する。

白百合女子大学「授業改善のための学生アンケート」の集計結果を活用した顕彰制度

[実施方法]

- ① 実施時期は各学期末とし、前期末は前期科目、学年末は後期科目と通年科目を対象とする。
- ② 集計の単位は授業毎とする。学部科目と大学院科目を区別しない。
- ③ 集計する設問は、以下の 6 項目（項目毎の平均点の合計／30 点満点）とする。
 - Q7 教員の説明はわかりやすかった。
 - Q9 教科書や配布資料など、教材は適切だった。
 - Q10 学生の質問や相談に対して、教員の対応は適切だった。
 - Q14 この授業に主体的に取り組むことができた。
 - Q15 この授業の内容に興味を持つことができた。
 - Q16 この授業の内容を十分に習得できた。
- ④ 顕彰対象は当該年度のアンケート実施対象授業のうち、6 名以上の回答が得られたものとする。
- ⑤ 顕彰部門は、「少人数」（履修者数 6～19 名）と「多人数」（履修者数 20 名以上）の 2 部門とする。
- ⑥ 白百合女子大学 FD・SD 推進委員会は、選考資料をもとに各部門第 1 位を確認、顕彰対象授業を決定する。
その際アンケート回答率によって順位を調整する場合がある。その後、顕彰対象授業の担当教員へ表彰を行う。
- ⑦ 表彰授業・担当教員名は、大学 Web サイトにて公表する。

[実施主体]

白百合女子大学 FD・SD 推進委員会

「授業改善のための学生アンケート」2025 年度後期 顕彰授業について

2026 年 4 月 30 日

白百合女子大学 FD・SD 推進委員会

「授業改善のための学生アンケート」は 2010 年度より実施し、2017 年度からは集計結果を活用した顕彰制度を導入しています。アンケートの結果は個々の授業やカリキュラム改善に役立てられているほか、高評価を得た授業を公表し、その授業の優れている点を大学全体で共有しています。なお 2022 年度より 2 年間で全科目のアンケートを実施することとし、2024・2025 年度は全科目区分を 2 分割して実施しています。2025 年度は、文学部専門科目、外国語科目、中等教職課程科目、大学院（国・フ・英・言）専門科目が対象です。

2025 年度後期の結果は以下のとおりです。顕彰された授業における工夫等を追って公開する予定です。授業のあり方は授業の数だけありますが、顕彰された授業における工夫を知ることにより、よりよい学びのためのヒントが得られる機会になればと願っています。

2025 年度後期

少人数部門（履修者 6～19 名）

国語国文学科専門科目 木曜 2 限 後期

「テーマ別研究Ⅱ／テーマ別研究Ⅳ」 武田 加奈子 先生（文学部国語国文学科教授）

多人数部門（履修者 20 名以上）

外国語科目 金曜 2 限 後期

「総合英語Ⅱ」 遊佐 重樹 先生（全学基盤教育部門グローバル言語・文化教育センター教授）

白百合女子大学「授業改善のための学生アンケート」の目的（実施要領より抜粋）

- ① さまざまな角度から学生の反応・実態を知ること、個々の授業の授業内容・教授方法等を、教員自身が見直し改善するための材料を提供する。
- ② 設備や機材、資料など、学習に適した環境を大学がどの程度提供できているかを測定し、これを改善していくための材料を得る。
- ③ 学生が学びたい内容を適切なレベルできちんと教授できているかを知り、大学全体、あるいは学科や学年ごとのカリキュラム内容を、必要に応じて改善していくための材料を得る。
- ④ 科目に対する学生の意欲や、授業時間外での学習の実態を把握することで、カリキュラムが想定している努力を学生が傾けているかを測定し、必要に応じて改善の方法を探るための材料を得る。
- ⑤ 学生に対して、自らの学習のあり方を見直し、大学での学習をより実りあるものとするための材料を提供する。

白百合女子大学「授業改善のための学生アンケート」の集計結果を活用した顕彰制度

[実施方法]

- ① 実施時期は各学期末とし、前期末は前期科目、学年末は後期科目と通年科目を対象とする。
- ② 集計の単位は授業毎とする。学部科目と大学院科目を区別しない。
- ③ 集計する設問は、以下の 6 項目（項目毎の平均点の合計／30 点満点）とする。
 - Q7 教員の説明はわかりやすかった。
 - Q9 教科書や配布資料など、教材は適切だった。
 - Q10 学生の質問や相談に対して、教員の対応は適切だった。
 - Q14 この授業に主体的に取り組むことができた。
 - Q15 この授業の内容に興味を持つことができた。
 - Q16 この授業の内容を十分に習得できた。
- ④ 顕彰対象は当該年度のアンケート実施対象授業のうち、6 名以上の回答が得られたものとする。
- ⑤ 顕彰部門は、「少人数」（履修者数 6～19 名）と「多人数」（履修者数 20 名以上）の 2 部門とする。
- ⑥ 白百合女子大学 FD・SD 推進委員会は、選考資料をもとに各部門第 1 位を確認、顕彰対象授業を決定する。
その際アンケート回答率によって順位を調整する場合がある。その後、顕彰対象授業の担当教員へ表彰を行う。
- ⑦ 表彰授業・担当教員名は、大学 Web サイトにて公表する。

[実施主体]

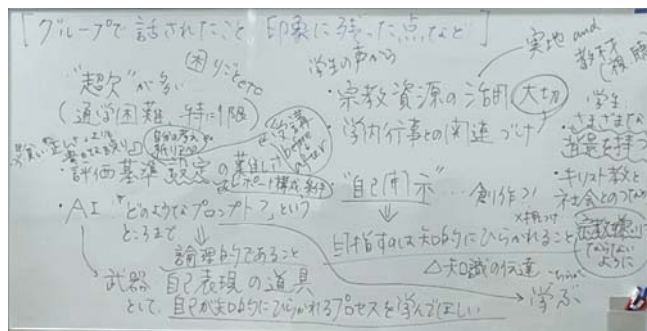
白百合女子大学 FD・SD 推進委員会

2025 年度 各センター・学科等の FD・SD 活動

I. 各教育組織にて実施した FD・SD 研修会

【カトリック教育センター】

テーマ (タイトル)	カトリック教育センター講師会
目的	学生の声や生成 AI 時代の課題を手がかりとして、宗教学科目が「何を学ぶ授業なのか」「何を評価しているのか」を探索／探究するため。
種別	教員：FD、職員：SD
開催日時	2026 年 3 月 19 日 (木) 10 時半～12 時半
場所 (開催方法)	セントポール・コイノニアルーム (2 号館 2 階 2207)
主催	カトリック教育センター
講師	カトリック教育センター教職員 (石井、海老原、山口、光藤)
参加人数・氏名	石井、釘宮、佐々木、海老原 (専任教員4名) 浅野、カブンディ、瀧岡、滝口、田口、土居、保坂 (非常勤教員7名) 山口菜 (専任職員1名)、光藤 (非常勤職員1名) 計13名
内容 (概略・成果等)	【プログラム】 第 1 部 連絡事項 (10:30～11:00) ○大学全体に関すること 2026 年度の入学者数及び各学年在学者数について - 教育組織の改編計画について ○カトリック教育センター関係 - 教員の異動について - 新カリキュラムへの移行及び在学者数の減少に応じた開講数調整計画について - セントポール・コイノニアルーム2025年度活動報告と2026年度活動計画について - その他 第 2 部 カトリック教育センターFD (11:00～12:30) テーマ：宗教学科目の授業を受講して、学生は何を学ぶのか 内容： - 学生から寄せられた宗教学科目の授業に関する意見の共有 - 個人ワーク・小グループでの意見交換 (授業で大切にしていること、学生の内にとどまってほしい学び など) - 評価やレポート、生成AIの活用をめぐる学生の受け止めについての対話 - 全体共有・まとめ 【成果】 後半部では、学生懇話会で示された意見を手がかりとして、授業における学びの在り方や評価の意味について意見交換を行った。宗教学科目の授業は、知識の伝達にとどまらず、受講学生が問いに向き合い思考を深めるプロセスそのものを学ぶ場であるとの認識を共有した。リラックスした雰囲気の中で対話が進み、実践を見つめ直すと同時に、2026 年度授業開始を目前に、各々の担当授業の運営に関する具体的なイメージを得る機会となった。
記入者	海老原晴香



【ライフ・リテラシー教育センター】

テーマ（タイトル）	全学基盤教育とライフ・リテラシー教育の新展開
目的	ライフ・教育センターの教育理念の伝達と情報共有
種別	FD
開催日時	2025 年 9 月 18 日(木)12:00～13:10
場所（開催方法）	対面（4 号館 4103）・オンラインのハイブリッド
主催	ライフ・リテラシー教育センター
講師	平尾 桂子、今井 福司
参加人数・氏名	ライフ・リテラシー教育センター専任教員 5 名：平尾桂子、内海崎 貴子、佐々木裕子、松前 祐司、今井福司 ライフ・リテラシー教育センター非常勤講師 10 名：山本みどり、小沼明生、榊原智子、藤田和美、若葉京良、越田年彦、柿山礼美、漆原 比呂志、今村優子、宮崎薫
内容 （概略・成果等）	ライフ・リテラシー教育センターの組織改編を説明した上で、目先の結果より、じっくり育つ成長を大切にしていることが確認された。 また学生対応をはじめとした授業運営の注意点について説明ならびに質疑応答を実施した。質疑応答では、実際の問題を取り上げながら、後期以降の授業改善に生かせるよう意見のやり取りが行われた。
記入者	今井福司

【情報教育センター】

テーマ（タイトル）	情報 SA 活動と情報共有会
目的	全学必修科目「はじめてのデータサイエンス」を中心に、25 年度の情報科目の SA（学生）・教員・職員が情報教育センターに集まり、学習支援のあり方について意見交換を行った。SA にとっては振り返りと他の SA との交流の機会とし、教員・職員にとっては SA 活動や授業の状況を把握し、改善点を議論する場とした。
種別	教員：FD、職員：SD
開催日時	2026 年 1 月 15 日（木）12：00～13：00
場所（開催方法）	情報教育センター2
主催	情報教育センター
講師	なし
参加人数・氏名	センター教員：小林、匂坂、山梨 センター職員：斎藤、田中（五十音順、敬称略） 情報 SA の学生：13 名
内容 （概略・成果等）	SA が授業で直面した課題や学生対応の状況を共有し、新入生ガイダンスを含む学習支援のあり方や SA の募集時期・方法について意見交換を行った。教員・職員はこれらを通じて SA 活動や授業の実施状況を把握し、今後の改善課題を確認した。 大学 HP（活動報告）："教える側"で成長！— 学生 FD 会議「情報 SA 意見交換会」を開催（ https://www.shirayuri.ac.jp/news/2025/002139.html ）
記入者	匂坂智子

【グローバル言語・文化教育センター】

テーマ（タイトル）	本学における新たな英語プログラム開設の必要性について
目的	本学に「グローバル言語・文化教育センター」が設立されたことに伴い、英語科目担当教員による新たなプログラムの開設を考える。
種別	FD
開催日時	2025 年 6 月 26 日（木）13:00～13:45
場所（開催方法）	第 2 会議室（対面）
主催	グローバル言語・文化教育センター
講師	Adrienne Johnson、倉住修 Osamu Kurazumi、Cecilia Smith
参加人数・氏名	善本、倉住、ジョンソン、スミス、遊佐、小原（敬称略、計 6 名）
内容 （概略・成果等）	かねてより文学部のみならず、人間総合学部の学生からも、より高度な英語力を身につけるための科目の増設の声が高まっていた。こうした要望に応えるべく、これまで英文科専門科目として開講されていた数科目を中心にして、グローバル言語・文化教育センターとして全学に開かれた独自のプログラムを設置したい。そのプログラムの名称を「Global Women Empowerment Program（仮称）」とした起案書を基に、3 名の講師によるプレゼンテーションの後、活発な意見交換を行なった。その結果、本学の学生が多様なキャリアに備え、積極的かつ自信を持って国際人として活躍できるようなスキルと能力を育成するプログラムの構築を目指していくことで意見が一致した。
記入者	遊佐重樹

テーマ（タイトル）	「グローバル言語・文化教育センター」オリジナル英語プログラム構築の可能性
目的	6 月 26 日に開催された第 1 回 FD において、センター独自の英語プログラムの構築を目指すことで意見が一致し、その後のセンター会議で（第 8 回～14 回）、プログラム内容について検討を重ねた。本日の FD では、大きく膨らんだプログラムのスリム化を図り、解説の実現可能なプログラムとして仕上げることを目指す。
種別	FD
開催日時	2025 年 10 月 30 日（木）13:15～14:00
場所（開催方法）	第 3 会議室（対面）
主催	グローバル言語・文化教育センター
講師	Adrienne Johnson、倉住修 Osamu Kurazumi、Cecilia Smith
	善本、倉住、ジョンソン、スミス、遊佐、小原（敬称略、計 6 名）
内容 （概略・成果等）	これまでにセンター会議等の話し合いで練り上げたカリキュラム表を基に、それぞれの科目の必要性について 3 名の講師によるプレゼンテーションの後、活発な意見交換を行なった。どの科目もプログラムの理念や目標と合致しており、開講すべきであると考えたが、一方で現実問題として CAP 制や資格取得のための時間割を考慮した場合、「よりシンプルで実現可能なプログラムを提供し、より多くの学生が履修するよう図るべきである」との結論に達した。なお、プログラムの名称を「International Skills & Communication Program」（ISC プログラム）とすることで意見が一致した。
記入者	遊佐重樹

テーマ（タイトル）	「International Skills & Communicaiton Program (ISC)」の目指すもの
目的	第2回FD（10/30）以降、教務課での話し合い、教務委員会、センター会議等を経て、「Internationa Skills & Communication Program」の骨格が固まった。そこで、本日のFDでは、多くの学生が履修するように分かりやすく解説するため、グローバル言語・文化教育センターがこのプログラムによって目指すものを簡潔に説明できるよう、プログラム全体のポイントを整理する。
種別	FD
開催日時	2025年12月11日（木）13:00～13:30
場所（開催方法）	第3会議室（対面）
主催	グローバル言語・文化教育センター
講師	Adrienne Johnson、倉住修 Osamu Kurazumi、Cecilia Smith
参加人数・氏名	善本、倉住、ジョンソン、スミス、遊佐、小原（敬称略、計6名）
内容 （概略・成果等）	「世界のどこでも輝ける女性を育てる」というスローガンを掲げた学生向けのプレゼンテーション資料を基に、3名の講師によるプログラム骨子の説明の後、活発な意見交換を行なった。短時間の説明でこのプログラムを学生に印象づけられるよう、履修することのメリット、概要、修了要件、テーマごとの科目名と内容について学生に訴えることで意見が一致した。なお、学生の目標やニーズに応えるため、多様な履修モデルを提案することでも意見が一致した。
記入者	遊佐重樹

【国語国文学科】

テーマ（タイトル）	配慮が必要な学生に対する授業対応について
目的	配慮が必要とされる学生に対する個別ケースの情報共有と検討を行い、今後のよりよい教育実践へとつなげる。
種別	FD
開催日時	2025 年 5 月 8 日(木)14:30～15:00
場所（開催方法）	国語国文学研究室 第三国研（対面）
主催	国語国文学科（FD 推進委員 常盤智子）
講師	なし
参加人数・氏名	専任教員 10 名 猪狩友一 伊東玉美 井上隆史 小林明子 川瀬卓 武田加奈子 常盤智子 名木橋忠大 萩野了子 油井原均
内容 （概略・成果等）	1 4 月からの対応についての確認と共有 ・ 学生からの要望、これまでの経緯の確認 ・ 授業補助ツールの利用に関する問題提起（収集されたデータの著作権管理など） ・ 外部機関作成の DVD に関する情報共有 2 今後の対応に関する問題点の確認と共有 ・ 緊急に対応が必要な案件について、調整経過を共有。授業補助者との情報共有の重要性を確認。 ・ 補助ツールの使用や外部機関からの情報収集の必要性を確認。 ・ 4 月からの関連授業での対応方法や工夫を共有。 ・ 学科で収集した情報を 2025 年度後期の授業担当者や事務部門（教務課・ウエルネスセンター・キャリア支援課等）と共有し、連携を続けていくことを確認。 ・ 後期授業に向けて、サポートスケジュール、サポート体制（学生補助者を含む）を大学全体で共有・構築していく必要があることを確認。 上記の問題に関する意見交換を通して、参加者は、学生対応への理解が深まり、授業内容・授業方法への見直しを再認識した。
記入者	常盤智子

【フランス語フランス文学科】

テーマ（タイトル）	2026 年度教科書会議
目的	2026 年度の教育内容・教育方法の検討
種別	FD
開催日時	2026 年 2 月 13 日（金）14：00～16：00
場所（開催方法）	オンライン
主催	フランス語フランス文学科
講師	必修科目各教員
参加人数・氏名	専任教員 8 名：海老根、大塚、越、辻川、デムナチ、畠山、ブルネ、善本 非常勤講師 18 名
内容 （概略・成果等）	専任教員と非常勤講師がオンラインで集まり、現在の学科の状況（学生のレベルや傾向）を全体会議で共有した後、各担当科目に分かれて教材の使い方や授業内容の確認、近年の指導で気になる点に関する意見交換などを行った。
記入者	海老根龍介

テーマ（タイトル）	Canva を有効に利用するために
目的	オンラインのヴィジュアルツールキット Canva について学ぶ
種別	SD
開催日時	2026 年 2 月 13 日(金) 16:10～16:40
場所（開催方法）	第 2 仏研
主催	フランス語フランス文学科
講師	越森彦（本学科教授）、昆ゆみ（本学科事務助手）、小川実優（本学科プログラムコーディネーター）
参加人数・氏名	教員 8 名：海老根、大塚、越、辻川、デムナチ、畠山、ブルネ、善本 職員 4 名：飯島、小川、昆、松原
内容 （概略・成果等）	Canva は学科やフランス文学会等の主催する各種イベントの広報のほか、教員の授業資料の作成など幅広い目的に使用できる。また授業などで学生がプレゼンテーションに利用するツールも、ほとんどが Canva であり、学生がどのようにして資料を作成しているかは、指導を行う上で教員が知っておかなければならない基本的知識と言える。本研修では、すでに事務や広報、教育の現場で Canva を使用している 3 名の教職員に講師をお願いし、基本操作や利用方法を学ぶと同時に、学生指導において注意すべき点の共有を行った。
記入者	海老根龍介

【英語英文学科】

テーマ（タイトル）	文学部改編構想（10月20日発表）の情報共有と意見聴取および提案検討
目的	文学部改編構想（AI 共創文化学部案）に関する情報共有を行い、執行部に求められているフィードバックに学科教員からの意見も盛り込み、より良い提案の形で提出するための検討を行う。
種別	FD
開催日時	2025年10月23日（木）13:00～14:30
場所（開催方法）	対面（第三英研）
主催	学科長・箕輪先生（文学部改編構想作業チームメンバー）
講師	同上
参加人数・氏名	6名（岩政、島崎、土井、ナイト、水越、箕輪（五十音順、敬称略））
内容 （概略・成果等）	10月20日夕方の文学部改編作業チームミーティングにおいて執行部（善本副学長）よりご提示いただいた新しい学部案について、まずミーティング配布資料と口頭での説明の内容を学科内で共有。質疑応答を経て、学部名称、内容等に関し、参加者で検討を行い、執行部へのフィードバック内容をまとめる。
記入者	土井

【児童文化学科】

テーマ（タイトル）	2027、28年度のカリキュラム及びクラス編成に関する意見交換会
目的	27年度、28年度のカリキュラムを段階的に改善し、クラス編成について知るとともに、よりよい教育の実践へとつなげる
種別	FD
開催日時	2026年3月5日
場所（開催方法）	児童文化学科研究室（対面にて開催）
主催	児童文化学科
講師	なし
参加人数・氏名	5名（トミヤマユキコ、間宮史子、水間千恵、やたみほ、山中智省）
内容 （概略・成果等）	児童文化学科では、25年度末から断続的に教員の定年退職が予定されており、新規着任教員へのスイッチを迅速かつスムーズに行う必要が生じている。また、全学での学部・学科再編の動きと連動して、学科として早急に対応すべき点も多々ある。そのため、次期学科長が中心となって、27年度、28年度のカリキュラムについて、クラス編成や人員配置等も含めて意見交換を行った。 1：開講科目の基本方針について 2：科目内容について 3：要確認事項について 4：プログラムについて 児童文学・児童文化を学ぶという学科の基盤（良さ）を守りつつ、時代に即して教育内容のアップデートを図りながら、他大学との競争力を高めていく、という点について教員間で共通のイメージを持ち、それに従って動いていくことが可能になった。
記入者	トミヤマユキコ

【初等教育学科】

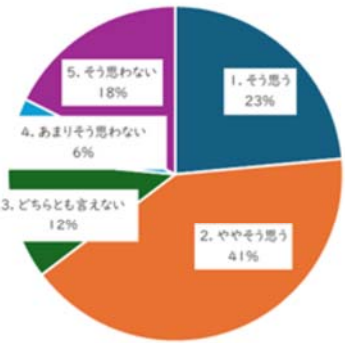
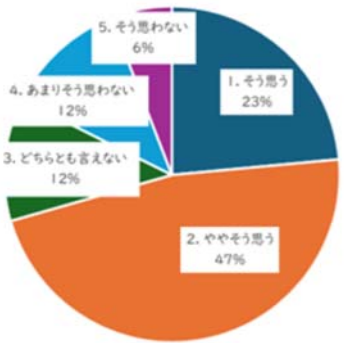
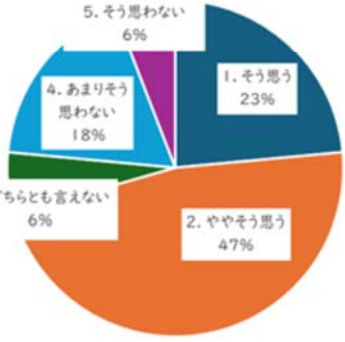
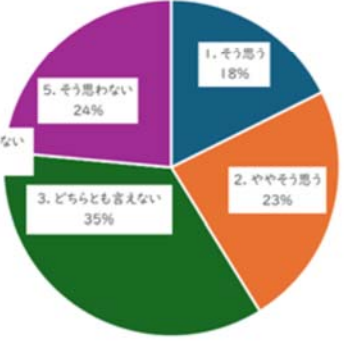
テーマ（タイトル）	初等教育学科の教育の特性を考える～2026 年度および次回要領・指針改訂前までのカリキュラム改善点等の整理～
目的	本学科の新資格導入、2026 年度・2027 年度のカリキュラム改善に向けた討議研修を行う。
種別	教員：FD、職員：SD
開催日時	2025 年 5 月 29 日（木）13:00～14:20
場所（開催方法）	白百合女子大学 第 1 会議室
主催	人間総合学部初等教育学科
講師	ファシリテーター：石沢順子（初等教育学科・教務委員）
参加人数・氏名	教員（11 名）：宮下 孝広、石沢 順子、神永 典郎、坂本 健、山中ともえ、高橋 貴志、中田 正弘、針谷 玲子、目良 秋子、土橋 久美子、根本 裕美 職員（1 名）：佐藤哲子
内容 （概略・成果等）	まず最初に保育所保育指針改訂の動きについて確認を行った。また、本学科に新たに導入する 2 つの資格について具体的導入時期や科目担当者、申請スケジュール等について検討した。これに合わせて他科目の整理等についての検討を行った。
記入者	目良秋子

テーマ（タイトル）	初等教育学科の教育の特性を考える～カリキュラム改善点等の整理～
目的	本学科の“魅力”発信について考えるとともに、本学科カリキュラムの検討を前回に続き検討する
種別	教員：FD、職員：SD
開催日時	2025 年 6 月 5 日（木）13:00～14:20
場所（開催方法）	白百合女子大学 第 4 会議室
主催	人間総合学部初等教育学科
講師	ファシリテーター：石沢順子（初等教育学科・教務委員）
参加人数・氏名	教員（11 名）：宮下 孝広、石沢 順子、神永 典郎、坂本 健、山中ともえ、高橋 貴志、中田 正弘、針谷 玲子、目良 秋子、川口 潤子、土橋 久美子 職員（1 名）：佐藤哲子
内容 （概略・成果等）	5 月の研修に引き続き、新資格導入について初期費用の確認および他学科生履修の可能性等について検討を行った。また、中期的な見通しを持つべく、学科の魅力を確かめものとするような今後の学科のあり方について検討を行った。
記入者	目良秋子

II. FD・SD 推進委員会委員の企画による FD・SD 研修会

テーマ（タイトル）	建学の精神に基づく白百合女子大学の教育を考える
目的	白百合女子大学への入学予定者を対象として作成された入学前教育の教材を手がかりとしながら、白百合女子大学の設立母体であるシャルトル聖パウロ修道女会の設立の経緯や活動について知り、白百合女子大学のルーツや、受け継がれる精神について理解を深め、受講者が白百合女子大学における職務の指針とする
種別	SD
開催日時	オンデマンド（各参加者の提出日を実施日とする）
場所（開催方法）	manaba course
主催	FD・SD推進委員会
講師	主旨説明及びアンケート作成担当：FD・SD推進委員会委員、白百合女子大学教育プロジェクト推進助成採択プロジェクト2020C（海老原・やた・大貫） 映像資料企画・制作：カトリック教育センター、白百合女子大学教育プロジェクト推進助成採択プロジェクト2020C
参加人数・氏名	17名（2025年4月1日～9月30日） 井上 隆史、倉住 修、大塚 陽子、常盤 智子、吉田 明日香、若林 資朗、遠藤 歩美、遊佐 重樹、やた みほ、スミス セシリア、ブルネ トリスタン アンリ、森下 淳子、松田 なつみ、豊村 かなみ、山中 ともえ、坂本 ひとみ、宮崎 明日香
内容 （概略・成果等）	事前課題・映像資料・事後課題の3部構成（manaba courseおよびYouTubeを利用） 想定される総所要時間：40分程度 事前課題の主旨は、白百合女子大学の建学の精神に関する内容について自分自身が学生に伝えられるかということや学生の理解を把握しているかということについて自己評価をすることである。また、映像資料視聴に先立ち、本SD研修会に参加することで受講者自身が期待する成果について、選択肢からの選択および「その他」を選択した場合には自由記述にて、明確にした上で映像資料の視聴を行うこととした。事後課題は本学の建学の精神に関する理解の深化や期待した成果に関する達成度とその理由を確認する設問等への回答を通して、研修成果を省察するものとなっている。 成果：事前課題における回答を下記円グラフ（n=17）で示す。 「シャルトル聖パウロ修道女会」について学生が理解できるように説明できるか/シャルトル聖パウロ修道女会およびシャルトル聖パウロ修道女会と白百合女子大学の関係について学生が理解できるように説明できるか/本学の建学の精神について学生が理解できるように説明できるか、いずれの問いに対しても「そう思う」あるいは「ややそう思う」とした受講者は半数を大きく超えた。一方で、白百合女子大学のルーツと建学の精神について学生がどのようなことを知っているかを把握しているかという設問に対し「そう思う」あるいは「ややそう思う」とした受講者は41%であり、また、事前課題に付した注意書き（「回答が全て「1 そう思う」の場合は、本研修会の内容は既に修得されている可能性があります。本研修会の受講は必須ではありません。受講するかどうかをご検討の上、受講される場合は下記に進んでください。」）の後にこれら受講者が本研修を受講の上、事後課題を提出したことからも、入学前教育教材を通して建学の精神について理解を一層深め、学生支援等の職務の指針とするという本研修の目的はSD研修会として適切なものであったと考えられる。受講者が期待する成果については「白百合女子大学とその建学の精神について理解を深める。」が最も多く（16名）、次いで「シャルトル聖パウロ修道女会と白百合女子大学との関係について理解を深める。」（9名）となっていた。 事後課題ではすべての受講者が映像資料内容に関する理解、白百合女子大学の建学の経緯や建学の精神についての理解の深化について肯定的評価をした。期待する成果についての達成状況については1名を除く全員が肯定的評価をした。「どちらともいえない」と回答した1名はその理由についてを尋ねる問い（1-13）に対し、「真・善・美ということを常日頃から大事にしていきたいと思いました。」と回答するにとどまっていた。 なお、本研修へのコメントに加え、むしろ本学の建学の精神のありかた、教職員への

	共有のしかたに対するコメントも寄せられており、シャルトルの理念が今日の様々な取り組みにどのように活かされるべきかについて、さらに具体的な例示の要望も出された（「日常の白百合女子大学の教員の役割について、又は学生の態度との関連についてもっと知りたかった。」「建学の精神について、ふわっとした方向性はわかりませんが、100字程度で表現するとしたら、どのように書けばいいのかわかりません。また、各自の受け取りで内容が異なることは望ましくないと思われます。教職員全員が同じ回答をできるような、明確で短い表現(少々長くても可)を共有できるといいなと思います。そして、大学案内も同じ内容で毎年掲載できるといいと思います。」「動画だけでなく、書類もいただけるといいと思います。文章であれば、今後も簡単に確認することができます。」）。
--	--

1-2 白百合女子大学の正門に表札がある「シャルトル聖パウロ修道女会」について学生が理解できるように説明できる。 	1-3 白百合女子大学とシャルトル聖パウロ修道女会の関係について学生が理解できるように説明できる。 
1-4 白百合女子大学が建学以来変わらず大切にしていること(建学の精神)について学生が理解できるように説明できる。 	1-5 白百合女子大学のルーツと建学の精神について、学生がどのようなことを知っているか把握している。 
記入者	海老原晴香

テーマ (タイトル)	建学の精神に基づく白百合女子大学の教育を考える
目的	白百合女子大学への入学予定者を対象として作成された入学前教育の教材を手がかりとしながら、白百合女子大学の設立母体であるシャルトル聖パウロ修道女会の設立の経緯や活動について知り、白百合女子大学のルーツや、受け継がれる精神について理解を深め、受講者が白百合女子大学における職務の指針とする
種別	SD
開催日時	オンデマンド (各参加者の提出日を実施日とする)
場所 (開催方法)	manaba course

主催	FD・SD 推進委員会
講師	主旨説明及びアンケート作成担当：FD・SD 推進委員会委員、白百合女子大学教育プロジェクト推進助成採択プロジェクト 2020C（海老原・やた・大貫） 映像資料企画・制作：カトリック教育センター、白百合女子大学教育プロジェクト推進助成採択プロジェクト 2020C
参加人数・氏名	6 名（2025 年 10 月 1 日～2026 年 3 月 31 日） 鈴木忠、太田百合子、仲宗根明美、椎橋げんき、中田正弘、杓名桂子
内容 （概略・成果等）	事前課題・映像資料・事後課題の 3 部構成（manaba course および YouTube を利用） 想定される総所要時間：40 分程度 事前課題の主旨は、白百合女子大学の建学の精神に関する内容について自分自身が学生に伝えられるかということや学生の理解を把握しているかということについて自己評価をすることである。また、映像資料視聴に先立ち、本 SD 研修会に参加することで受講者自身が期待する成果について、選択肢からの選択および「その他」を選択した場合には自由記述にて、明確にした上で映像資料の視聴を行うこととした。事後課題は本学の建学の精神に関する理解の深化や期待した成果に関する達成度とその理由を確認する設問等への回答を通して、研修成果を省察するものとなっている。 成果：事前課題における回答では、「白百合女子大学とシャルトル聖パウロ修道女会の関係について学生が理解できるように説明できるか／白百合女子大学が建学以来変わらず大切にしていること（建学の精神）について学生が理解できるように説明できるか」という設問に対し「そう思う」あるいは「ややそう思う」とした受講者は半数（3 名）であった一方、「シャルトル聖パウロ修道女会について、学生が理解できるように説明できるか」という設問に対し「そう思う」あるいは「ややそう思う」とした受講者は 33%（2 名）、「白百合女子大学のルーツと建学の精神について、学生がどのようなことを知っているか把握しているか」という設問に対し「そう思う」あるいは「ややそう思う」とした受講者は 17%（1 名）に留まった。このことから、入学前教育教材を通して、建学の精神について理解を深めるという本研修の目的は、SD 研修会として適切なものであったと考えられる。 受講者が期待する成果については「白百合女子大学とその建学の精神について理解を深める」が最も多く（6 名）、次いで「指導する学生が白百合女子大学についてどのようなことを知っているかを把握する」（2 名）となった。 事後課題ではすべての受講者が映像資料内容に関する理解、白百合女子大学の建学の経緯や建学の精神についての理解の深化について肯定的評価をした。期待する成果についての達成状況については 1 名を除く全員が肯定的評価をした。「どちらともいえない」と回答した 1 名はその理由についてを尋ねる問い（1-13）に対し、「理解（腹落ちしていないのではなく、知らない領域なので解釈という意味です）に時間をいただきたい。」と回答していた。 本研修で視聴された動画に関し、受講者 2 名から「1 年に一度は視聴した方が良く感じた」「動画は限定公開のようですが、学内で流し続ける場所があっても良いと思います」とのコメントがあり、大学のルーツ周知についての継続的な取り組みの必要性が示された。 また、「この動画を見ても、具体的にはどのように学び、どのように知識を愛に変えるのか（それは卒業後の各自に委ねられているのか）がわかりにくかったです。入学前の人にもわかりやすい表現で、隣人愛とは何か、学びを愛に変えるとはどのようなことか、入学前後でどのような人物になることを目指しているか、を示せると良いと思います」とのコメントもあり、大学全体として建学の精神を教育内容や業務に落とし込む具体的な方法を望む声が挙がった。
記入者	海老原晴香

テーマ（タイトル）	「『語学・文化教育』を事例として生成 AI 活用を考える」
目的	①生成 AI の特徴をつかむ（ChatGPT と Canva） 学生が生成 AI をよく活用しているツールである ChatGPT と Canva を例に生成 AI の共通性と多様性を知る。 ②授業実践の共有 教員による生成 AI 活用授業（DeepL 等を使ったフランス語翻訳比較授業）の紹介を通じて、語学・文化教育における生成 AI 活用の可能性、失敗やリスクを考える。 ③教育の本質的問い直し 「語学・文化教育とは何を学ぶ場か？」というテーマをもとに、AI 時代における教育の目的を再考する。 ④実践的な学びへの接続 グループディスカッションを通じて、参加者自身の業務に落とし込む。
種別	教員…FD、職員…SD
開催日時	2026 年 2 月 13 日（金）10 時～12 時
場所（開催方法）	3 号館地下 1 階 R3005 教室
主催	2025 年度 FD・SD 推進委員会委員海老原、白百合女子大学教育プロジェクト推進助成採択プロジェクト 2024A
講師	教育プロジェクト 2024A
参加人数・氏名	石沢順子、佐々木裕子、中田正弘、善本孝、武田加奈子、大貫麻美、ジョンソン エイドリエン レネー、眞榮城和美、村中由美子、やたみほ、石川尚子、佐藤哲子、高橋大介、森田亜裕美、山口菜見子、中井真弓（計 16 名）
内容 （概略・成果等）	【プログラム】 1.導入【5 分】（発達心理学科 眞榮城） 2.生成 AI の特徴をつかむ：ChatGPT と Canva【10 分】（グローバル言語・文化教育センター ジョンソン） 3.事例共有：教員による生成 AI 活用授業の実践紹介【10 分】（フランス語フランス文学科 村中） 4.クロストーク【10 分】 テーマ：「語学・文化教育は何を学ぶ場か」（企画者：初等教育学科 大貫、村中、国語国文学科 武田） 5.グループディスカッション【45 分】 クロストークをうけて、本学における生成 AI の活用について協議 6.全体共有：各グループの気づきを共有【30 分】 7.まとめ：研修の学びを整理【5 分】（児童文化学科 やた） 8.manaba 事後アンケート記入【5 分】 【成果】 当日は講師側に体調不良による欠席が 1 名あったが、事前申込者全員の参加を得て、予定通りの活動が行われた。グループディスカッションは 3 班に分かれて行った。全てのグループが、所属や立場の異なる混成メンバーで構成されるように講師側でグループの設定をした。参加した 14 名の事後アンケート結果から、以下の成果があったことがわかった。 まず、研修による具体的な学習成果について自由選択部分の回答では、生成 AI について「活用の可能性を以前より具体的にイメージできるようになった。」と「リスクや限界について、理解が深まった」が 78.6%（11 名）と高い回答率を得た。このいずれか、或いは両方を選択した回答者が 92.9%（13 名）であり、残る 1 名は「他の立場（教員/職員）の視点に気づいた」を選択しており、補足説明の自由記述では、「発達の視点から AI の影響を考える必要がある」という他の参加者の言葉が印象に残ったとしていたことから、参加者の全員に、実践事例紹介や他者との対話を通して、生成 AI の活用に関する認識の深化・拡大があったことが自覚されており、このことから、目的①と②が達成されていたと評価できる。

次に、「本研修会が生成 AI をめぐる課題や可能性について考えるきっかけになりましたか」という問いに対して、「非常にそう思う」が 92.9% (13 名)、「そう思う」が 7.1% (1 名) であり、肯定的回答が 100% であった。また、本研修の趣旨である「正解やガイドラインを示すのではなく、対話を通じて考える場であること」の伝達についても、「非常にそう思う」が 85.7% (12 名)、「そう思う」が 14.3% (2 名) であり、こちらも肯定的回答は 100% であった。これらの結果から、本研修会の目的③と④について、研修設計の意図と実施内容との整合性が高く、対話型研修として適切に機能していたと評価できる。

これらの結果から、本研修は単なる知識提供にとどまらず、実践的理解と批判的視点の涵養の双方を促す内容となっており、バランスの取れた学習成果を生み出していると評価できる。

各プログラム内容の有用性については、事例共有、クロストーク、ディスカッションの全ての項目において否定的評価はなかった。特にディスカッションについては、「とても役立った」が 92.9% (13 名)、残る 1 名が「役立った」を選択しており、立場の異なるグループメンバーとの対話型の活動が学習効果を高める上で中核的な役割を果たしていたことが明らかとなった。この結果は、「本研修会は、教職員が一緒に考える場として有意義だったと思いますか。」という問いに参加者全員が「はい」と答えていたこととも一致する。

さらに、研修会参加後の行動意欲に関する自由選択では、「業務の中で生成 AI の活用を検討したい」と「学内での情報共有や議論に参加したい」が 64.3% (9 名)、「授業や教育活動で生成 AI を試してみたい」が 57.1% (8 名) となっており、「特になし」を選択した参加者はいなかった。このことから、本研修が生成 AI に関する認識の深化・拡大にとどまらず、実践への移行可能性を有したものであったことが示唆された。



記入者

海老原晴香・大貫麻美

III. その他の FD・SD 研修会

テーマ（タイトル）	FD・SD 研修会「即時オープンアクセス続編・オープンアクセスに関わって研究者が知っておきたいこと」
目的	学術論文等の即時オープンアクセスについて更に理解を深めるため
種別	教員：FD、職員：SD
開催日時	2025 年 7 月 31 日～2026 年 3 月 31 日 （各参加者のアンケート提出日を実施日とする）
場所（開催方法）	manaba course 上でのオンデマンド形式
主催	善本副学長、近江事務局長 協力：図書館、FD・SD 推進委員会
講師	今井福司准教授（ライフ・リテラシー教育センター）
参加人数・氏名	専任教員 44 名、専任職員 19 名、非常勤職員 3 名 計 66 名
内容 （概略・成果等）	2025 年 5 月 12 日に開催した全学 FD・SD 研修会「2025 年度即時オープンアクセスの義務化に向けて」の続編。 今井福司先生作成の動画「即時オープンアクセスについて 続編」と「オープンアクセスに関わって研究者が知っておきたいこと」を各自で視聴する形式。併せて前回の研修会で挙がった質問の中から代表的なものについての回答も公開された。 受講後のアンケートでは、内容について「よく理解できた」「おおよそ理解できた」を合わせた回答が 9 割近くを占めた。 自由記述回答では、本学の取り組みに言及する意見などもある一方で、「理解が進んだ」「わかりやすく勉強になった」といった意見が複数あり、研修目的は概ね達成できたと思われる。
記入者	FD・SD 推進委員会事務局・森田

テーマ（タイトル）	FD・SD 研修会「2025 年度即時オープンアクセスの義務化に向けて（研究データ・研究データ管理編）」
目的	研究データおよび研究データ管理を取り巻く国内外の動向について理解を深めるため
種別	教員：FD、職員：SD
開催日時	2026 年 1 月 26 日～2026 年 3 月 31 日 （各参加者のアンケート提出日を実施日とする）
場所（開催方法）	manaba course 上でのオンデマンド形式
主催	オープンアクセス推進ワーキンググループ 協力：FD・SD 推進委員会
講師	今井福司准教授（ライフ・リテラシー教育センター）
参加人数・氏名	36 名（専任教員 18 名、専任職員 15 名、非常勤職員 3 名）
内容 （概略・成果等）	前回（2025 年 7 月実施の続編）に引き続き、オンデマンド形式の動画視聴で実施。 受講後のアンケートでは「研究データの管理が必要とされる背景について理解が深まりましたか。」及び「研究データを管理するために、研究者や大学に具体的に何が求められているのか理解できましたか。」という質問に対して、「よく理解できた」と「おおよそ理解できた」という回答をあわせると 100%という結果となった。自由記述回答では「さまざまな具体的な実例が理解の助けになりました。」「文系においても研究者に求められる責務が存在することを改めて理解することができ、参考になりました。」といった感想があった。実施期間が 2 ヶ月と短かったこともあり前回より参加者は少なかったものの、確実に受講者の理解の助けになっていることが窺える。
記入者	FD・SD 推進委員会事務局・森田

以上

2025年度全学FD・SD研修会報告

「2025年度即時オープンアクセスの義務化に向けて」

1. 実施概要

日 時：2025年5月12日（月）16時30分～17時30分

会 場：11号館3階 クララホール

実施方法：対面、Zoomでのリアルタイム配信、録画視聴

講 師：ライフ・リテラシー教育センター准教授 今井福司先生

報 告：図書館事務課 リポジトリ担当 瀬田尚主任

主 催：FD・SD推進委員会、善本副学長、近江事務局長

協 力：図書館

対 象：専任教員（助教及び特別専任を含む）・事務職員

参加人数：専任教員 75名、専任職員 60名、非常勤職員 12名 合計 147 名

※ 実施時の専任教員数（サバティカル、休職、産休、育休者除く）73名

※ 実施時の専任職員数（休職、産休、育休者を除く）60名

※ 専任教員参加者にはサバティカル中の教員2名も含まれる

※ 終了後のアンケート提出において参加人数を確認した（登壇者を除く）

参加形態：対面 26名、オンライン（リアルタイム） 64名、録画視聴 57名

2. 研修会の趣旨・内容

2024年2月、内閣府より「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」が公表され、2025年度公募分の競争的研究費を使用した学術論文および根拠データの即時公開が義務化となった。このことを受けて、まずは全学的に理解を深め課題を共有するために、入門編として本研修会が開催された。研修会では、最初に今井先生よりオープンアクセスの概要と即時オープンアクセス義務化について、自身が所属する学会での経験も踏まえて説明があり、続いて図書館でリポジトリを担当する瀬田主任より、本学の学術機関リポジトリの現状と運用、並びにオープンアクセス方針について説明があった。なお、当日のスライド資料に加え、今井先生からは専門用語の用語集を、また瀬田主任からは本学の機関リポジトリに登録可能なものについて、リスト形式で共有いただいた。最後に近江事務局長より、本学の研究データポリシーの整備予定について説明があった。

3. 参加者アンケート集計結果

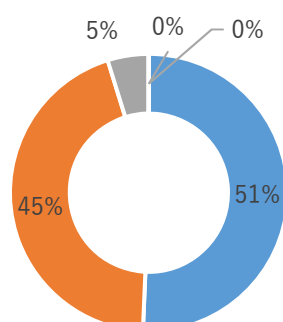
3-1. 選択式の設問（回答数 146）

以下のとおりそれぞれの理解度を確認した。回答者の属性及び回答者数は設問（4）を除き、教員 75 名、職員 71 名である。「よく理解できた」と「おおそ理解できた」の回答を合わせるといずれも 90%を超えており、総体的に各参加者の理解が得られたと判断することができるだろう。一方で、設問（3）「内閣府から大学や研究者に求められている「即時オープンアクセスの義務化」の内容について理解できましたか」では「どちらとも言えない」が7%（10名）、「あ

まり理解できなかった」が1%（2名）、設問（5）「オープンアクセス化に向けて現状本学が行っていることについて理解できましたか」では「どちらとも言えない」が5%（7名）、「あまり理解できなかった」が2%（3名）、設問（6）「オープンアクセス化に向けて大学がこれから行うべきことについて理解できましたか」では「どちらとも言えない」が7%（10名）、「あまり理解できなかった」が2%（3名）という結果であり、その属性は教員より職員の割合が多かった。これは自由記述の回答も参照すると、業務に直結しない職員において、少数ではあるが理解が深まっていないと推察できるであろう。

（1）オープンアクセスという言葉について理解できましたか

（回答数146）

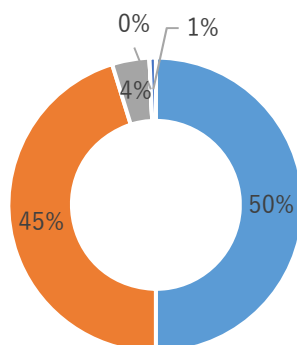


選択肢	教員	職員	合計
よく理解できた	46	28	74
おおよそ理解できた	29	36	65
どちらとも言えない	0	7	7
あまり理解できなかった	0	0	0
全く理解できなかった	0	0	0

（単位：人）

（2）オープンアクセスが必要とされている背景について理解

できましたか （回答数146）

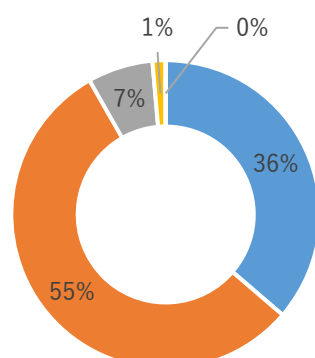


選択肢	教員	職員	合計
よく理解できた	48	25	73
おおよそ理解できた	25	41	66
どちらとも言えない	1	5	6
あまり理解できなかった	0	0	0
全く理解できなかった	1	0	1

（単位：人）

（3）内閣府から大学や研究者に求められている「即時オープンアク

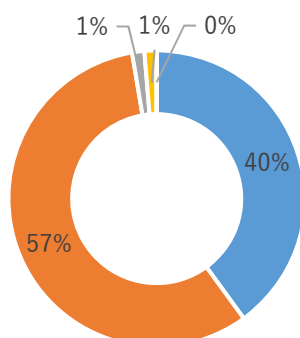
セスの義務化」の内容について理解できましたか（回答数146）



選択肢	教員	職員	合計
よく理解できた	34	19	53
おおよそ理解できた	39	42	81
どちらとも言えない	2	8	10
あまり理解できなかった	0	2	2
全く理解できなかった	0	0	0

（単位：人）

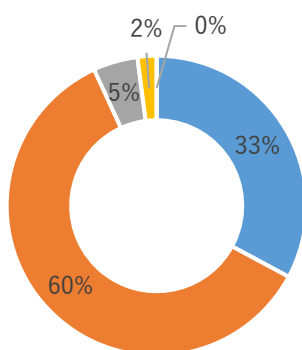
(4) 教員への質問です。公的研究費を得た場合に今後行うべきことについて理解できましたか (回答数75)



選択肢	教員	職員	合計
よく理解できた	30	-	30
おおよそ理解できた	43	-	43
どちらとも言えない	1	-	1
あまり理解できなかった	1	-	1
全く理解できなかった	0	-	0

(単位：人)

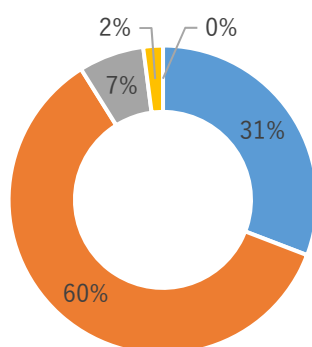
(5) オープンアクセス化に向けて、現状本学が行っていることについて理解できましたか (回答数146)



選択肢	教員	職員	合計
よく理解できた	32	16	48
おおよそ理解できた	42	46	88
どちらとも言えない	1	6	7
あまり理解できなかった	0	3	3
全く理解できなかった	0	0	0

(単位：人)

(6) オープンアクセス化に向けて、大学がこれから行うべきことについて理解できましたか (回答数 146)



選択肢	教員	職員	合計
よく理解できた	29	16	45
おおよそ理解できた	44	44	88
どちらとも言えない	2	8	10
あまり理解できなかった	0	3	3
全く理解できなかった	0	0	0

(単位：人)

3-2. 自由記述の設問

(7) 「本研修でわからなかったこと、もう少し詳しく知りたかったことがあれば入力してください」では40名から回答があった。参加者の所属する分野における懸念事項や具体的な対応を問うもの、さらに詳細を知って理解を深めるため追加の研修を希望する意見のほか、本学における取り組みや分担、今後の見通しについての説明を求める声が複数あった。以下抜粋である。

- リポジトリに情報を記載する際にインタビューデータ等もアップロードする必要があると話されていましたが、その場合、インタビューをする前の研究説明時にリポジトリにインタビュー内容が記載されることを伝えないと個人情報上問題になると思いますし、そのようにインタビュー内容自体がオープンになると事前に分かっていると正直な気持ちが話しにくいということもあるのではと思います。特に私のいる臨床心理学分野で、そのような研究参加者の個人情報と公開による公益性のバランスが難しいと思いました。
- 今回、新たに国の指針が明確にされたことで、①本学のこれまでの取り組みではどの部分が不足しており、②今後、どの部分に注力して改善に取り組み、③いつまでにどこまでを実現していくのか、というような流れがわかるフローチャート様のものがあると、より理解が深まるように思います。
- 具体的な手続きとして、これまでのリポジトリの手続きにさらに加わることに留意することとして、どのようなことがあるのかについて教えていただきたいです。
- 研究データポリシーついでの方針が決まったら、詳しい説明をお願いできるとありがたいです。

(8)「本研修会に対するご意見や感想などをご記入ください。」では 74 名から回答があった。タイムリーかつ重要なテーマをわかりやすい説明と豊富な資料で説明いただいたことに対する感謝や、こちらの回答でも次回の研修会を望む意見が多数見られた。以下抜粋である。

- とてもわかりやすく有益なものでした。特に今井先生が学会誌の現状や問題点などの背景をていねいに説明してくださったので、今回のオープンアクセスが何を目指しているのか、何をすべきかが納得できました。
- 資料もご説明も大変分かりやすく、オープンアクセスの経緯や現状、課題などを改めて確認することができました。紀要については学内体制を整えてくださっていますので、学会誌などに投稿する場合は事前によく確認したいと思います。
- 学術情報の公開と共有の重要性について理解を深めることができた。また、これまで研究成果は専門誌等に限定的に掲載されることが多く、広く社会に還元されにくい側面があり、オープンアクセスの推進により誰もが自由に情報へアクセスできる環境が整いつつあることを理解した。
- 研究者や大学のおかれている現状について、良く理解することができました。今回の研修はまだ導入部分の研修であるというご説明でしたので、次回の研修をお待ちしたいと思います。
- 現状の自分の業務範囲では関連がなく、内容を理解するのに時間がかかってしまったが、自分で情報を取り入れるにはさらに難度が高く、今回教員だけでなく職員の理解も深めるために教職員全員向けの研修としていただけたのはとてもありがたかった。

以上

2025 年 9 月 18 日
FD・SD 推進委員会

2025 年度 全学 FD・SD 研修会 実施報告書
「PROG をいかに学生指導に活用するか」

2022 年度から学生の学修成果のアセスメントとして導入している PROG テストについて、教職員が現在の活用状況を知り、学修者目線での教育の質の向上のために、今後、これをどのように学生指導に活かしていくかをともに考えるために、内部質保証委員会と共催の形で、また教務課、キャリア支援課の協力を得て、学内 FD・SD 研修会を企画・実施した。詳細は以下のとおりである。

日時・会場: 2025 年 7 月 14 日(月) 16 時 30 分~18 時 00 分 クララホール

方 法 : 対面、Zoom でのリアルタイム配信、録画視聴

テ ー マ : 「PROG をいかに学生指導に活用するか」

講 演 者・報告者:

(株)リアセック 教育開発支援グループ ソリューションプランナー 島崎雅史氏

キャリア支援課 課長 大葉勇一氏・キャリア支援課 主任 深沢祐寿氏

対 象: 全専任教員(助教及び特別専任教員を含む)・全職員

(全専任教員(サバティカル、休職、育休、産休を除く)、教務課及びキャリア支援課
専任職員は参加必須、その他の専任・非常勤職員の参加は任意)

1. 企画概要

PROG を提供している(株)リアセックのソリューションプランナー島崎氏に、PROG の結果からうかがえる本学の学生の傾向や個人データの読み取り方について紹介いただいたあと、キャリア支援課課長の大葉氏、同主任の深沢氏より、キャリア支援課が現在どのような学生支援を行っているか、そこで PROG をどのように活用しているかを事例を交えて説明いただいた。

2. 参加人数

専任教員: 75 名/受講必須教員 73 名(受講必須教員参加率 100%)

専任職員: 40 名/受講必須職員 13 名(受講必須職員参加率 100%)

非常勤職員: 3 名

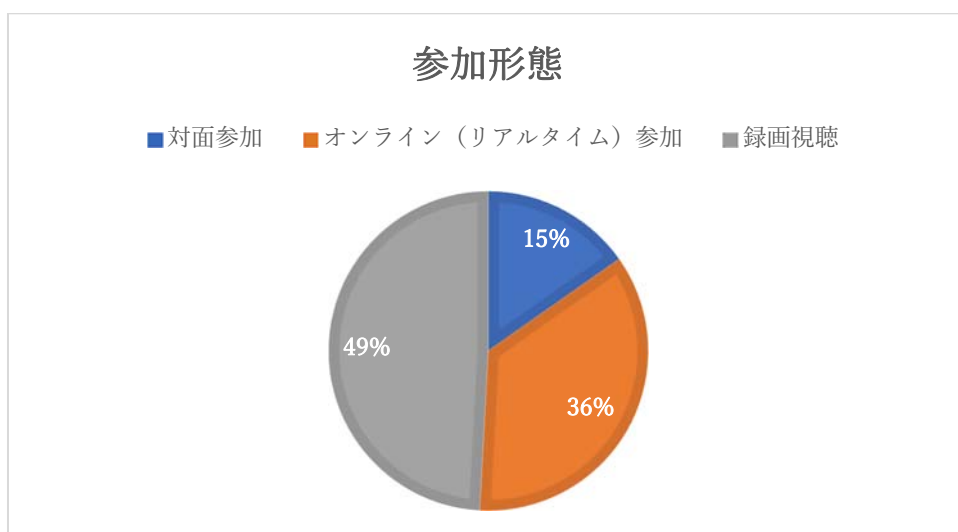
合計 118 名

3. 参加者アンケート

実施後のアンケート集計結果を以下に示す。2025 年 9 月 1 日時点での集計であり、回答数は 118 人である。自由記述は原則として全文を掲載したが、回答者個人が特定できる箇所については一部省略したものもある。

① 参加形態

対面参加	18 名
オンライン（リアルタイム）参加	42 名
録画視聴	58 名

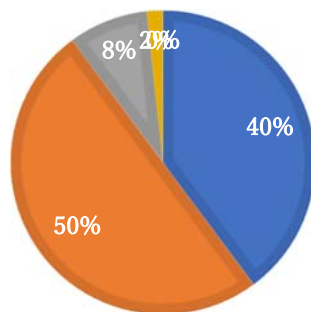


② PROG の活用方法について理解できましたか

よく理解できた	47 名
おおよそ理解できた	59 名
どちらとも言えない	10 名
あまり理解できなかった	2 名
全く理解できなかった	0 名

PROGの活用方法について理解できましたか

■ よく理解できた ■ おおよそ理解できた ■ どちらとも言えない
■ あまり理解できなかった ■ 全く理解できなかった

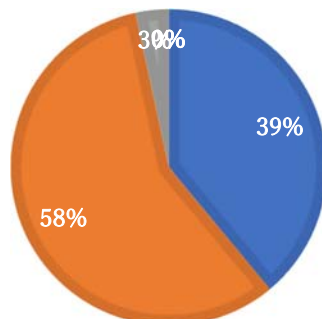


③ キャリア・アドバイザーの PROG 活用状況について理解できましたか

よく理解できた	46 名
おおよそ理解できた	68 名
どちらとも言えない	4 名
あまり理解できなかった	0 名
全く理解できなかった	0 名

キャリア・アドバイザーのPROG活用状況について理解できましたか

■ よく理解できた ■ おおよそ理解できた ■ どちらとも言えない
■ あまり理解できなかった ■ 全く理解できなかった

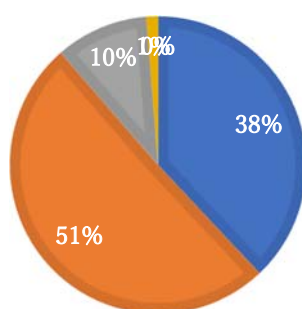


- ④ 教員への質問です。学生の PROG 個人データの活用について理解できましたか。
(教員は必須)

よく理解できた	30 名
おおよそ理解できた	40 名
どちらとも言えない	8 名
あまり理解できなかった	1 名
全く理解できなかった	0 名

教員への質問です。学生のPROG個人データの活用について理解できましたか。(教員は必須)

■ よく理解できた ■ おおよそ理解できた ■ どちらとも言えない
■ あまり理解できなかった ■ 全く理解できなかった



- ⑤ 「PROG」その他の活用方法について意見があればご記入ください。(自由回答)

33 名から回答があった。学生面談等において有効に活用するだけでなく、授業運営やカリキュラム改善にも活かすことができるのではないかと、積極的な意見が見られた。他方で、個々の学生の個性を、企業人・職業人に求められる能力を基準に評価することに繋がりうるリスクの指摘や、本来質的評価として見るべき事柄を量的評価として測定することへの疑義も見られ、テストの持つ特性、テストを活用する際に留意すべき点、大学の教育理念との関係など、さらに議論を深めていく必要性が示唆されている。

- ⑥ 本研修会でももう少し詳しく知りたかったことがあればご記入ください。(自由回答)

27 名から回答があった。データへのアクセスの可否や方法といった技術的な疑問と同時に、現在、文学部のみで採用されているWアドバイザー制度の今後の展開や、アカデミック・アドバイザーとキャリア・アドバイザーの連携の実態・役割分担、他大学の活用事

例、学生自身による受け止め方などについて、さらに知りたいという希望が見られた。また PROG で測定される「能力」と大学教育の目的との関係について問う意見があり、この点に関しては教職員ともにさらに考える機会が求められるように思われる。

⑦ 本研修会に対するご意見やご感想などをご記入ください。(自由回答)

48 名から回答があった。概ね好意的な感想であるが、⑤・⑥の回答も踏まえると、PROG とあるべき学生支援の関係については、全学的にさらに考えていく必要があると考えられる。

以上

2025 年度大学院 FD 研修会報告書 「大学院をめぐる状況について」

1) 実施概要

実施日：2025 年 10 月 2 日（木） 16：10～16：40

場所：大会議室

主催：FD・SD 推進委員会・大学院専門委員会共催

対象：2025 年度文学研究科委員会構成員

参加人数：2025 年度文学研究科委員会構成員：41 名

うち動画視聴を含めた参加者数：41 名

参加職員：事務局長、大学経営推進室室長（大学院専門委員会事務局）、大学経営推進室統括室長、教育・研究支援グループ長

2) 研修会の趣旨・内容：

大学院を取り巻く状況は激しく変化している。文科省の「大学院入学者選抜実施要項」の改定が久しぶりに行われ、学校教育法施行規則の一部改正においても、大学院に重きをおいた対応が求められた。2025 年 2 月に公表された中教審答申「我が国の「知の総和」向上の未来像 ― 高等教育システムの再構築 ―」も、大学院教育に大きな変革を迫る内容となっている。

この流れを大学院担当教員全員が理解し、本学としてすでに対応した点、現在対応策を整備している点、将来的に対応が必要となる可能性がある点を共有するため、研究科長が学内外の現状と課題を概説し、大学院のあり方をともに考える機会とした。

3) 研修会の成果・総括：

終了後アンケートによれば、参加教員 41 名のうち、31 名（75.6%）が「研修会参加により、制度大学院をめぐる状況について理解が深まった」、6 名（14.6%）が「研修会参加により、大学院をめぐる状況についてはおおよそ理解できた」と回答し、「研修会の内容はすでに理解していた」が 3 名、「まだ完全に理解できていないところがある」は 1 名であった。教員の理解促進に寄与した様子がうかがえる。

記述回答からは、学外の昨今の流れを踏まえ、学部と大学院との連携強化やキャリアパスの明示、実効性のあるキャリア支援等の課題について、本学に何ができるか真剣に検討しようとの意欲が伝わってきた。他方で、大学院生の増加を計る国の方向に無批判に追随することへの危惧や大学院がどういうところかを知ってもらうための工夫の必要性の指摘、さらには現在学部で進められている改組・再編とあるべき大学院のあり方とをどう繋げていくべきかに関する具体的な考察や問いかけ等も記されている。大学院に関する学外の状況は加速度的に変化しており、学内からのさまざまな声を拾い上げながら、本学としてできることを追求していくための、よいきっかけとなったと考えられ

る。

4) 終了後アンケート集計結果（回答数 39）：

質問1 本日のFD研修会により、大学院をめぐる...ましたか。当てはまるものを選択してください。

41 件の回答



質問2 大学院について課題だと思うことや研修会の感想等があれば記入してください。

(15 件の回答)

- ・ 研修会ありがとうございました。現在の大学院をめぐる状況が理解できました。現在英文専攻には教員の専修免許取得を目指して入ってくる学生が多いのですが、改組後の国際文化学科では教員免許が取れないことになると大学院にまで影響が波及しそうで心配です。
- ・ 今回も大変ありがたい内容でした。感謝申し上げます。学生確保、(論文の) 質の向上、D 修了生 (学位取得者) への教歴提供方法等、課題は多いです。
- ・ 大学院をめぐる現在の状況、そして、本学大学院の状況についてよくわかりました。ありがとうございました。
- ・ 個人的に学部 비해、大学院に関しての課題は見過ごされがちであったように見ていました。その意味で今回の研修によって、本学の課題について理解が深まり、有意義であった。
- ・ 大学院に関しては、自分自身の大学院観をアップデートする必要があることがよくわかりました。入試、教育、キャリアなどについて情報公開を進め、大学院進学希望者との齟齬がないようにはかりたいと考えました。学校教育法施行規則など細やかなご説明をいただき、ありがとうございました。
- ・ 資料等、詳しいご説明をお伺いし、所属専攻としてどのような指導体制を目指していくべきか見直す機会となりました。ありがとうございました。
- ・ 研究がより発展するためという名目で行われている、様々な提出物の要請が、本来の目的の障壁になってはいないのか？といううっすらとした疑問がある。皆で修士・博士をとろう、という空気感にも。

- ・ 大学院生を増やす方向に進むようだが、修士論文が書けない人のために書かなくても良いシステムを導入したり、内部進学でさほど学識を問わないような流れになっていることを考えると、きちんと研究ができる学生に育てる責任をどれほど教員が感じるか、教え方の工夫をどれほど試行錯誤していかなければならないかをまじめに考えてほしい。これからは就職の指導もしなければならぬようなので、ものすごく院生に手間をかけて養成する必要があると思われるが、その覚悟はどれほどあるのか疑問に感じるばかりでした。
- ・ 短時間に多くのことを要領よくご説明いただき、ありがとうございました。 今後に実施される改組に伴って、学部との連携のあり方が見通せず、やや不安を感じております。
- ・ とても勉強になりました！個人的には、大学院のイベントに学部生を参加させるとか、学部の講義・演習に院生がやってくるとか、まずは「大学院生という生き物がいる」ってことがわかんないと、院進を考えるひと増えないんじゃないかな～と思ってまして、自分のゼミではすでに交流の機会を（ちょっとずつですが）もうけています。あと、社会人院生は超歓迎なんですけど、いま社会人がわざわざ来たいと思える院になっているかは謎、というか、魅力ある先生はいっぱいいると思うんですけど外部に伝わっているかが謎…学部の学生募集もそうですが、広報のやり方をかなり大胆に変える必要があるんじゃないかなと思っています。
- ・ 知らないこともあり、状況を学びました。ありがとうございました。
- ・ 分かりやすい資料とご説明をありがとうございます。学部と大学院の連携、院生へのキャリアパスの提示の必要性を教えていただき、やはり新学部の新学科においても教職課程を持つておくことが重要だと感じました。
- ・ 博士課程進学の前相談にきたが、博士課程とはどういうところかについての理解がそもそもなかったため、双方の時間の無駄に思えた。必要最低限のことはあらかじめ分かってからコンタクトを取るような措置を検討してもらいたい。（個人が特定され得る記述が含まれているため要約を記載）
- ・ 他大学が既に取り組んでいること、本大学院が今後取り組むべきことなどについて理解を深めることができました。今後に活かしたいと思います。ありがとうございました。
- ・ 大学院に関する全国および本学の状況についてとても勉強になりました。発達心理学専攻につきましては、学士修士6年一貫制や5年での早期修了制、博士課程も含めた長期履修制度等、今後に向けての課題だと存じておりますので、今回の研修を機に具体的な検討を進めて参りたいと思います。

以上

（作成：2025 年度文学研究科長 海老根龍介）

2026 年 2 月 26 日
FD・SD 推進委員会

2025 年度 全学 FD・SD 研修会 実施報告書 「文系大学教育における ICT 利用の実際」

1. 研修会の趣旨

本学では 2028 年度の学部・学科改編に合わせて BYOD の導入を検討している。

BYOD によって授業内での ICT 活用の可能性が広がる一方、すでに導入している大学ではインフラ面での課題等も指摘されている。

本研修では情報システム学がご専門である中央大学国際情報学部教授の飯尾淳先生をお招きして、BYOD をはじめとする文系大学における ICT 活用の可能性と課題を実例に基づいてお話しいただく。

2. 概要

日 時・会場：2025 年 12 月 22 日（月）16 時 20 分～18 時 00 分 大会議室

形 式：対面・オンラインのハイブリッド形式

テーマ：「文系大学教育における ICT 利用の実際」

講演者：中央大学国際情報学部教授 飯尾 淳 先生

対 象：専任教員（助教及び特別専任を含む）、事務職員

企 画：善本 孝教学担当副学長

主 催：FD・SD 推進委員会

3. 参加人数

専任教員：76 名/受講必須教員 75 名（受講必須教員参加率 100%）

専任職員：58 名/受講必須職員 58 名（受講必須職員参加率 100%）

非常勤教員：1 名

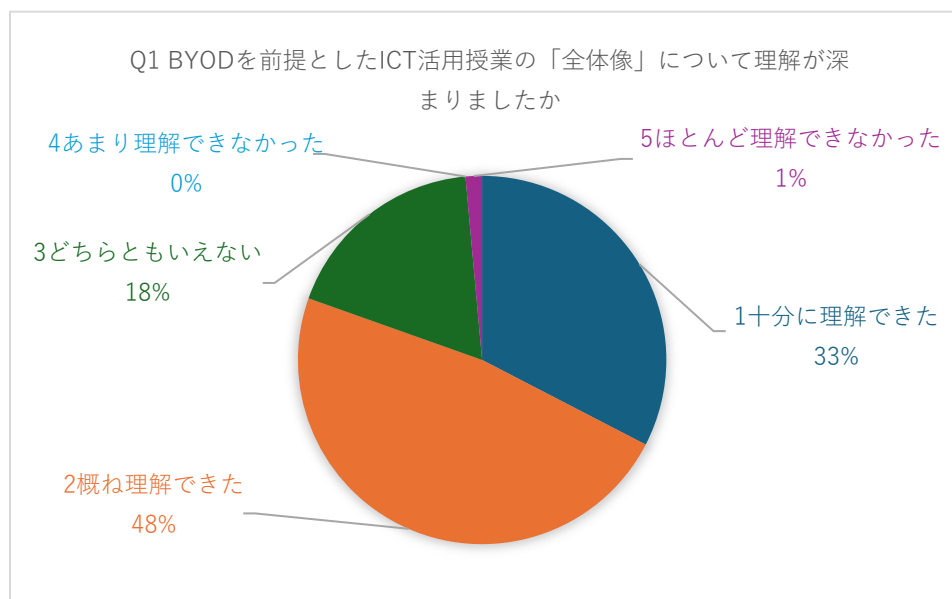
非常勤職員：4 名

合計 139 名

4. 全学 FD・SD 研修会「文系大学教育における ICT 利用の実際」参加者アンケート 集計結果（回答者数 138 名）

Q1：BYOD を前提とした ICT 活用授業の「全体像」について理解が深まりましたか。

1 十分に理解できた	45 人
2 概ね理解できた	66 人
3 どちらともいえない	25 人
4 あまり理解できなかった	0 人
5 ほとんど理解できなかった	2 人

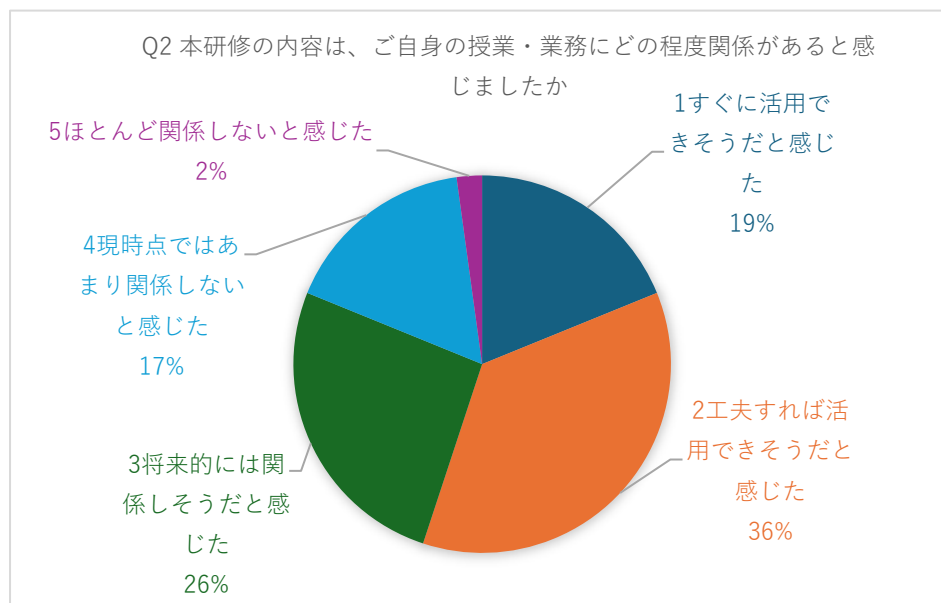


【コメント】

「十分に理解できた」が33%、「概ね理解できた」が48%、合計82%という結果であり、BYODについて学内では概ね理解がされていると言えよう。

Q2：本研修の内容は、ご自身の授業・業務にどの程度関係があると感じましたか。

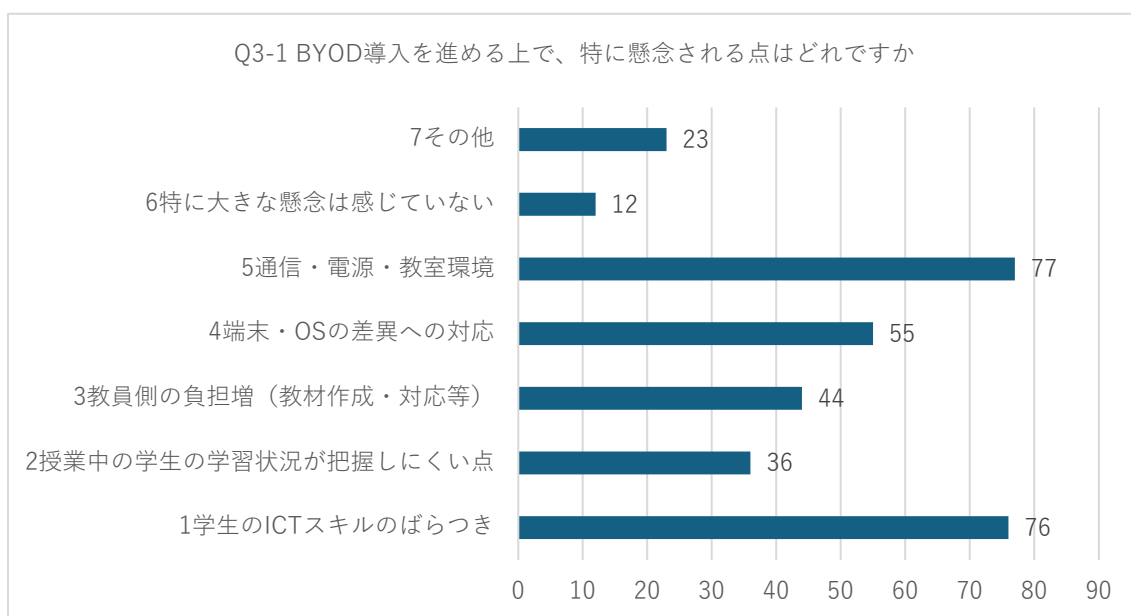
1 すぐに活用できそうだと感じた	26 人
2 工夫すれば活用できそうだと感じた	50 人
3 将来的には関係しそうだと感じた	36 人
4 現時点ではあまり関係しないと感じた	23 人
5 ほとんど関係しないと感じた	3 人



【コメント】「すぐに活用できそうだと感じた」は 19%にとどまっている。「工夫すれば活用できそうだと感じた」「将来的には関係しそうだと感じた」が合わせて 62%であり、将来必用になりそうだと感じているが現時点ではまだ身近に感じていない教職員が多いといえるだろう。

Q3-1：BYOD 導入を進める上で、特に懸念される点はどれですか。

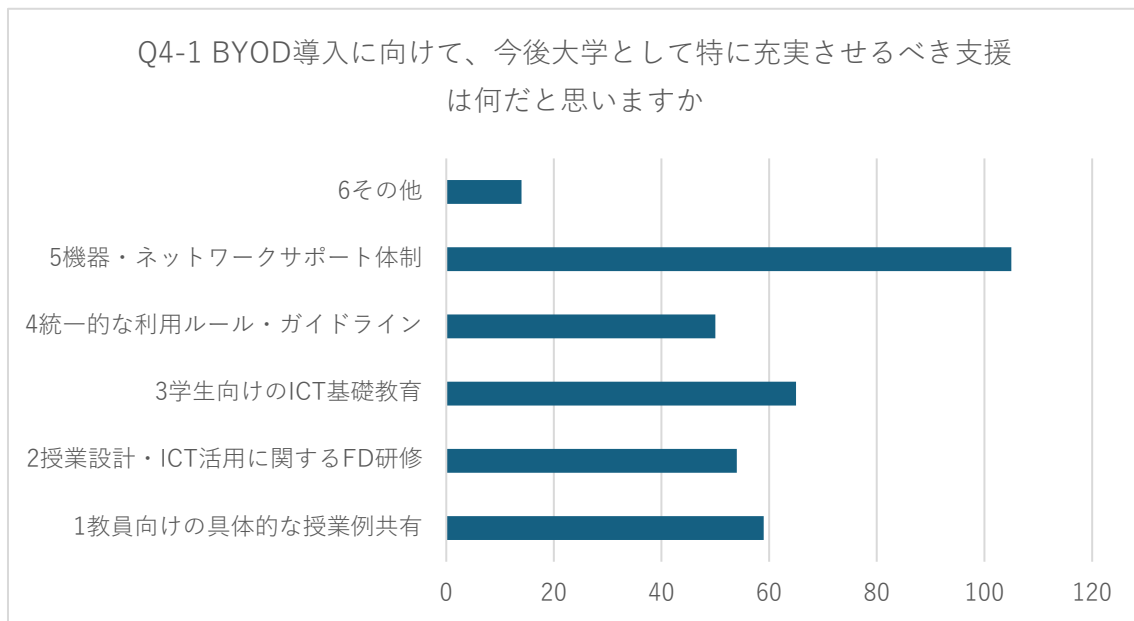
1 学生の ICT スキルのばらつき	76 人
2 授業中の学生の学習状況が把握しにくい点	36 人
3 教員側の負担増（教材作成・対応等）	44 人
4 端末・OS の差異への対応	55 人
5 通信・電源・教室環境	77 人
6 特に大きな懸念は感じていない	12 人
7 その他	23 人



【コメント】学生の ICT スキルのばらつきと通信・電源などインフラ整備への懸念が多かった。BYOD 導入までに学生への ICT スキルの指導のあり方を検討し、十分なインフラを整備することが望まれている。

Q4-1:BYOD 導入に向けて、今後大学として特に充実させるべき支援は何だと思いますか。

1 教員向けの具体的な授業例共有	59 人
2 授業設計・ICT 活用に関する FD 研修	54 人
3 学生向けの ICT 基礎教育	65 人
4 統一的な利用ルール・ガイドライン	50 人
5 機器・ネットワークサポート体制	105 人
6 その他	14 人



【コメント】「機器・ネットワークサポート体制」という回答が最も多く（回答者の 76%）、次いで「学生向けの ICT 基礎教育」を回答者のほぼ半数が選んでいるという結果である。また、「授業設計・ICT 活用に関する FD 研修」と「教員向けの具体的な授業例共有」を合わせると 113 人（全体の 82%）が選んでいる。学生への指導と同時に教員に対する研修、サポートも強く求められているといえよう。

Q5：BYOD 導入に関するご意見、または本研修に対するご感想があれば自由にご記入ください。

今回の研修会に対する自由記述回答では、BYOD 導入に向けた授業デザインや LMS 活用の具体例が評価される一方、本学の現状とのギャップや準備不足に対する懸念も多く寄せられている。

特に、学生の ICT 基礎能力のばらつき、電源・通信環境・教室レイアウトなど設備面の課題、教員・学生双方を支える専門職員の不足は、導入可否を左右する大きな論点として共有されているといえるだろう。

また、生成 AI の急速な普及を踏まえ、AI 時代に学生が身につけるべき基礎力の整理や、

その指導方針の確立を求める意見も多く見られた。さらに、教員の ICT 負担への不安や、既に ICT 活用を進めている層との温度差も示され、段階的な研修や事例共有の継続が必要であるとの指摘があった。

一部には研修内容が本学の実情に合致していないとの批判も見られたが、多くの参加者が BYOD 導入の可能性と課題を本学の文脈で具体的に考える契機となったと評価している。本研修を第一歩として、実態に即した導入計画と導入後の支援体制の構築を求める意見が多かった。

以上